

1 すいでん 水田には、たくさんの生きものがくらしていた！

いまの日本の水田の多くは、きちんと区画されていて、水路もコンクリートでつくられているところが多いね。そうした水田には、イネ以外には、赤トンボかカエルぐらいしかいないみたいだ。魚のいる水田は、もうどこにもみあたらないね。でも、きみたちのおじいちゃん、おばあちゃんが子どものころ、ということはいまから50年くらいむかしの日本の農村は、泥の池や水路で囲まれていたよ。家は、わらぶき屋根。水田には魚や鳥がいて、どの農家にも、ウシやウマ、ヤギ、ヒツジ、ニワトリ、ウサギなどの家畜が飼われていて、とてもにぎやかだったんだ。

すいでん

水田には多くの生きもの

むかしは、田植えのころ大雨がふると、腹にいっぱい卵をつめた、大きなフナやナマズが水路をさかのぼり、産卵のために田んぼに入りこんできたんだ。やがて田んぼの中に、小さなフナやまっ黒いナマズの稚魚がみられたよ。むかしの水田には、フナ、ナマズ、ドジョウ、エビ、カエル、ヒル、ヤゴ、ゲンゴロウ、タガメ、ミズカマキリ……なんでもいたんだ。魚や昆虫をはじめ、いろんな生きものがいたのが、いまの水田とちがっているところだね。そのころの水田は、生きものたちにみちあふれていたんだよ。

すいでん

水田とはどんな場所？

水田は、イネをつくる場所に決まっているよね。辞書にも「水田—水を入れて、水稲などをつくる耕地」と書かれてあるよ。でも、それだけだろうか？ 中国の博物館に、古代の水田を描いた粘土板があるんだ。そこには、イネと人間と魚と鳥が描かれているよ。そう、大むかしからアジアの水田は、イネだけでなく、魚やエビや鳥（アヒル）を生産し、人びとはそれを食べてきたんだ。日本でも1950年代まで、田んぼの魚（ドジョウ）やエビやタニシを捕まえて食べてきたよ。長野県佐久地方には、水田でイネを育てながらコイを飼う、水田養鯉という有名な伝統技術もあるんだ。

